The Japan Society of Educational Sociology

女子高等教育の構造変動と進路分化の規定要因

○米川英樹（大阪教育大学）

○原　清治（大阪府立布施工業高校）

○片山陽子（大阪教育大学大学院）

1　はじめに

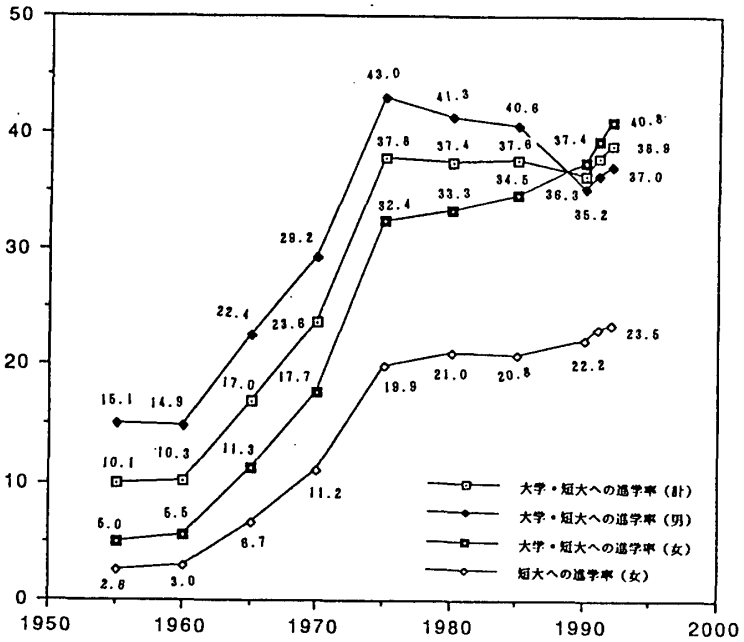
高卒女子の高等教育機関進学者のうち、約 2/3 は短大か４年制女子大のいわゆる「女子向け」の高等教育機関に進んでいる。この比率は近年徐々に低下しつつあるが、依然として女子の高等教育の中心的存在であることには変わりはない。高卒女子はなぜ「女子向け」高等教育機関に進学していくのであろうか。そして、それは強いられたものなのであろうか、あるいは自ら希望したものなのであろうか。そして女子の高等教育の将来をどのようにとらえるべきなのであろうか。

本研究は、以下の３点を焦点とする。第１に、戦後の女子高等教育機会の変遷と今日の女子高等教育機会の問題点の把握である。第２は、女子がどのような基準で進路を決定するか、特に４年制共学大、女子大、短大の進路分化はいかなる要因によって説明できるかという点である。第３は、今後の女子の高等教育機会のあり方の検討を行うことである。

2　戦後の女子高等教育機会の変遷

戦後の教育制度の変革により、女子の大学進学がようやく認められるようになったものの、昭和３０年の女子の高等教育進学率は５％にすぎず、男子の１５％と比べ、大きな格差が存在した。その後、地方国立大学の普及、短期大学や私立大学の増加などによって女子の高等教育進学率は次第に向上していった。平成元年には男子の進学率を抜いて３６．８％に至り、形の上では男女の間の格差はなくなったかのように見える（図１）。しかし、女子の高等教育機会を男子のそれと比べた場合、大きな違いが存在する。それは、女子大と短大の存在である。平成４年に女子の高等教育進学者の中に占める女子大の進学シェアは９％、短大で５８％であり、この２つの教育機会は依然として女子の高等教育の大部分を占めている。この現状をみる限り、女子の高等教育は、閉鎖的性別集団の中で行われている。

それではなぜ女子は、４年制大学ではなく、女子大や短大を選ぶのだろうか。これには３つの視点からのアプローチが必要であろう。第１は、高等教育を提供する側からのアプローチである。女子の高等教育機関は、主として、①もともと女子の教育機会が少ない戦前の社会状況の中で、女子の専門学校として出発し、女子大や短大に昇格した経緯をもつ古参の高等教育機関、②私立の女子高等学校で卒業生を受け入れる高等教育機関を併設したもの（特に昭和３０年代から４０年代からの高度経済成長期にこのケースが多い）、③その他（その中には近年の看護専門学校の短大昇格をも含む）等があげられる。これら３つのタイプの女子の高等教育機関は、その時代背景の中で、女子の学習ニーズを満たすために生まれたものであり、進学をめざす多くの女性にとって代替可能性の少ない主要なルートを作っていった。第２は、高等



（図１）　男女の高等教育進学率

NII-Electronic Library Service

The Japan Society of Educational Sociology

教育卒業後の女子の進路からのアプローチである。女子の高等教育卒業後の就職率は、短大よりも４年制大学が高い時代が長く続き、たとえば昭和４０年で４年制大学（女子大を含む）は６６．７％で短大では５７．４％であった。昭和４４年になると４年制大学は６１．５％、短大は６５．６％となり、それ以降、短大卒業後の就職率は４年制大学を上回っている。ちなみに平成４年の女子の就職率は４年制大学が８０．４％、短大が８６．８％である。昭和４４年に女子の高等教育進学率は１５％を越え、トロウのいわゆる「マス段階」に入ったのであるが、この時期を境に高等教育機関、就中、短大の位置づけに大きな変化が生じたことがうかがえる。すなわち、「就職に有利な短大」はこのころから現実のものになっていた。それ以前は、就職に直接結びつかない、いわゆる教養教育が短大の主たる社会的機能であった。また、職種としては、短大・大学ともに専門的職業につく比率が低下し、それにかわって事務的職業や販売職が短大・大学生の主たる職業キャリアを形成するようになる。さらに、第３次産業の拡大と女子の高等教育進学率の上昇は、平行的に進行していき、第３次産業での女子の雇用の拡大は、進学率を押し上げる１つの要因になったとも考えられる。女子が女子大や短大を選ぶ進学行動を説明する第３の考え方は、高卒女子自身の進学要求である。４年制共学大、女子大、短大に進む学生は、それぞれ異なった進学要求を持っている可能性がある。男子が職業的役割に応じた進路選択を行うのに対して、後でも述べるが、女子の進路選択はより複雑である。男子と同様に職業的役割の取得を目的とした進路選択とともに、将来の性別役割分業の予期的社会化のために進路を選択する傾向がある。もっとも、これは女子の側が強く望んで選択するばかりではない。女子の高等教育のマス化・ユニバーサル化に伴って、入れる機関に入ろうとする強制的就学現象の結果として、「仕方なく」あるいは「なんとなく」就学する傾向の結果であるともいえよう。

このような女子の高等教育構造は、危機に瀕している。近年の短大の志願率の低下傾向と女子大の偏差値の相対的低下はこれを端的に示している。そして、平成６年度に１５の短大が４年制大学への移行を予定していることに示されるように、短大の４年制共学大・女子大への昇格、女子大の共学大への移行への動きは、これを踏まえた経営者の危機回避への最大の方策であろう。

３　女子の進路分化の規定要因

短大という女性向けの高等教育機関への進学者と４年制共学への進学者の分化はどのようなメカニズムで生じるのであろうか。本発表要旨では、４年制共学と女子大を合わせた「４年制大学」と「短大」進学の間での進路分化をとりあげる。

（表１）　サンプルの構成

学校名	A短大	B短大	C短大	D女子大	E女子大	F女子大	G大学	H大学	I大学
所在地	京都府	兵庫県	奈良県	京都府	兵庫県	兵庫県	京都府	大阪府	大阪府
設置主体	私立	私立	私立	私立	私立	私立	私立	国立	私立
内部進学	有	無	無	有	有	有	無	無	有
偏差値ランク	B	C	C	A	B	B	A	A	B
サンプル数	158名	136名	175名	191名	58名	97名	93名	102名	48名

（有効サンプル数　1059名）

用いるデータは、１９９２年６月から９月にかけて行った関西地区に位置する短大、女子大、４年制共学大、各３校、計９校の学生に対する「学生の性役割意識調査」に基づいている。なお、調査は自記式質問紙を用い、回答は集団記入法によって得た（表１）。

進路分化に際して、ここでは性役割意識と達成意欲の強さが影響を与えると考えて、進路分化モデルを作成した。特に、家庭での親の学歴、職業、しつけ、役割モデルとしての母は、性役割意識と達成意欲を高めたり低めたりする。結果的に、達成意欲が強い女子は４年制大学に、性役割意識が強い女子は短大に進学すると考えられる（図２）。

進路分化に及ぼす「性役割意識」の影響力を考えるために、進路分化と関連の強い要因を取り出し、それぞれがどの程度の強さで進路分化に影響しているのかということを林の数量化Ⅱ類を用いて明らかにした。

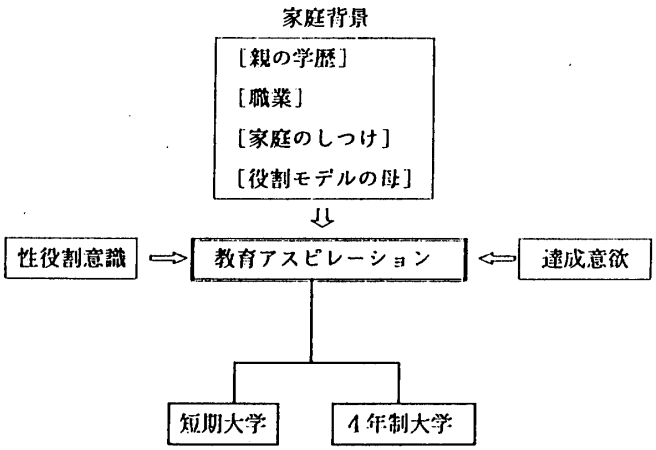
図３は、偏差値が異なる短大２校と大学３校を取り出し、階層の代替変数である「職業」「父学歴」「母学歴」、広い意味での性別観を示す「勉強で男にかなわないと思った」「性役割意識」「男女のどちらがトクか」の変数、

NII-Electronic Library Service

The Japan Society of Educational Sociology

それから達成意欲のうちで、短大と4年制大学を弁別する変数とカテゴリーウェイトを明らかにしようとするものである。これによると、偏相関係数の最も高いものは達成意欲であり、次に性役割意識が位置づき、「職業」「母学歴」「父学歴」の階層変数がそれに続く。具体的には、達成意欲が高く、非伝統的な性役割意識をもち、中流階層出身のものは4年制大学に進学する傾向が強く、達成意欲が低く、伝統的な性役割意識をもち、労働者階層出身のものは短大に進学する傾向が強い。これは、先に述べた図2のモデルを跡づけるものである。

他方、図4は、偏差値の影響力を統制するために、Bランクの4年制共学大、女子大、短大を取り出し、「同じ学力水準の女子の高等教育進学者の進路分化」の分化



（図2） 女子の高等教育進路分化モデル

$\sqrt{\eta}=0.499$

変数名	カテゴリー	ウェイト	偏相関	順位
職業	専門管理	0.365	0.140	3
	会社員	-0.150		
	サービス・技能工	-0.248		
父学歴	中学	-0.466	0.109	5
	高校	-0.072		
	高等教育以上	0.225		
母学歴	中学	-0.016	0.114	4
	高校	-0.137		
	高等教育以上	0.398		
母の生活	専業主婦	0.067	0.034	8
	パート労働	-0.087		
	共働き	0.017		
勉強で男にかなわないと思った	YES	0.169	0.071	6
	NO	-0.093		
達成意欲	高い	0.870	0.343	1
	中	-0.096		
	低い	-0.838		
性役割意識	伝統的	-0.312	0.158	2
	中	-0.081		
	非伝統的	0.379		
男女のどちらがトクか	男性	-0.080	0.045	7
	どちらでもない	0.002		
	女性	0.103		

（図3）大学・短大の進路分化の規定要因（A・Cランク）

$\sqrt{\eta}=0.336$

変数名	カテゴリー	ウェイト	偏相関	順位
職業	専門管理	0.161	0.079	6
	会社員	-0.143		
	サービス・技能工	0.328		
父学歴	中学	0.137	0.101	5
	高校	-0.305		
	高等教育以上	0.327		
母学歴	中学	0.208	0.026	8
	高校	-0.047		
	高等教育以上	0.045		
母の生活	専業主婦	0.418	0.115	4
	パート労働	-0.399		
	共働き	-0.127		
勉強で男にかなわないと思った	YES	-0.479	0.136	3
	NO	0.322		
達成意欲	高い	0.106	0.053	7
	中	0.060		
	低い	-0.286		
性役割意識	伝統的	-0.549	0.148	2
	中	0.077		
	非伝統的	0.513		
男女のどちらがトクか	男性	0.163	0.152	1
	どちらでもない	0.630		
	女性	-0.485		

（図4）大学・短大の進路分化の規定要因（Bランク）

NII-Electronic Library Service

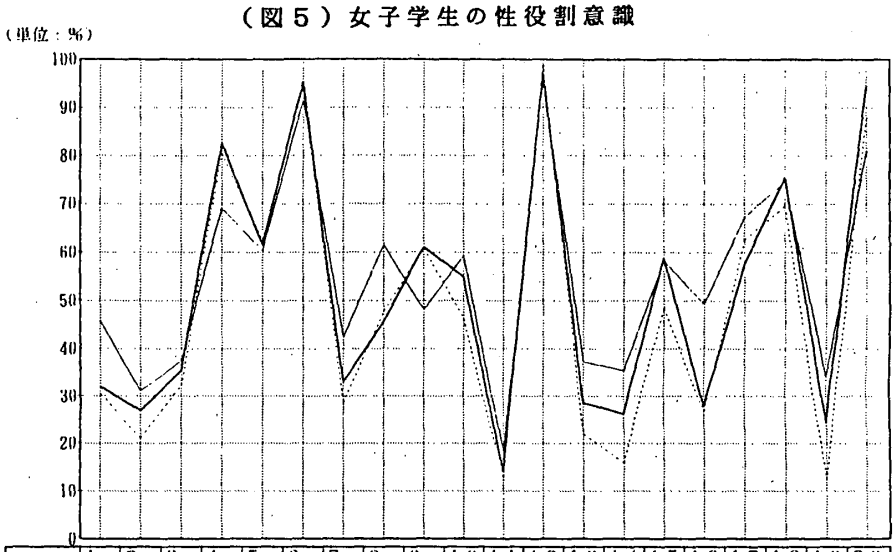
The Japan Society of Educational Sociology

メカニズムを明らかにしようとしたものである。「男女のどちらがトクか」「性役割意識」「勉強で男にかなわないと思った」の性別観を示す項目が上位を形成し、「女がトク」「伝統的な性役割意識」「男には勉強でかなわないと思ったことがある」のカテゴリーを選んだものは短大進学の傾向が強く、「（男女の）どちらで（トクで）もない」「非伝統的性役割意識」「男には勉強でかなわないと思ったことがない」層は、4年制大学に進学する傾向が現れた。「職業」や「父学歴」や「母学歴」などの階層変数も多少進路分化に関わっているものの、性別観よりも影響力は弱い。

このように、女子の進路分化は、まず、成績や達成レベルが4年制か短大かについては決定的な影響力をもつことは男子と同様であると考えられるが、同じ成績や達成レベルである場合は、性役割意識をはじめとする性別観が大きく影響するという点で興味深いものである。すなわち、女子の進路分化は、将来の職業の予期的社会化によって規定される層と結婚や家庭生活について強くコミットしたいとする層に分化していくのである。

4　今後の女子のありかたをめぐって

（図５）女子学生の性役割意識



	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
短大	45.8	31.1	37.4	69.1	60.4	91.5	42.4	61.5	48.1	59.3	18.3	95.9	37.3	35.4	58.3	49.3	67.3	74.5	33.9	81.3
女子大	32	26.9	35.5	82.6	61.5	95.3	33	45.5	61.1	54.9	14.2	97	28.6	26.2	58.9	27.9	57.6	75.4	24.4	94.7
共学大	30.6	21.1	32.3	80.5	62.4	94.2	28.6	47.7	60.9	46.3	12.8	99.1	22	15.9	48.5	26.8	62.6	69.5	12.2	88.1

1. 男の子にも女の子にも、家事は平等に手伝わせるべきだと思う。
2. 世の中には、女性に向かない仕事は数多く存在すると思う。
3. 生まれつき、女性は男性より家事に向いていると思う。
4. 社会における知的な仕事の多くが男性の手にあるのは、ごく普通のことだと思う。
5. 経済力のない男性は尊敬されないと思う。
6. 男性がお菓子作りをしたり、編み物をしたりするのは馬鹿げたことだと思う。
7. デートの際、主に男性が費用を払うのがよいと思う。
8. 女性でも男性でも、同じ内容の仕事には、全く同じ地位と賃金が支払われるべきだと思う。
9. 男女平等を主張する女性は可愛気がないと思う。
10. 結婚をするとき、男性の学歴は女性よりも高い方が望ましいと思う。
11. 夫が家庭の雑用を受け持ち、妻が家計をまかなってもよいと思う。
12. 子供は「男の子は男の子らしく、女の子は女の子らしく」育てるのがよいと思う。
13. 女性は女性としての権利を主張するよりも、よい妻やよい母となることのほうが重要だと思う。
14. 女性にも男性と全く等しい雇用の機会が与えられるべきだと思う。
15. 子供を産み、育てるのが女性の幸せだと思う。
16. 女性が家庭外で活動している現代のような社会では、男性も皿洗いや洗濯のような家事をすべきだと思う。
17. 母親が働いていると、子供の成長に悪い影響を与えると思う。
18. 女性は頑張って勉強するよりも、髪の手入れや服装に気を使う方が結局は得をすると思う。
19. 国や社会の管理・運営は、男性に任せておくのがよいと思う。

NII-Electronic Library Service